板橋～王子を歩く

JR埼京線 板橋駅 東口駅前広場 集合・出発　　JR京浜東北線 王子駅で解散予定　　約5.1km

1. JR板橋駅

1885（明治18）日本鉄道品川線の品川－新宿－赤羽開通に伴い、板橋駅も開業。
1909（明治42）に山手線となる。

2. 近藤勇・永倉新八の墓、近藤勇・土方歳三の供養碑　慶応4年4月25日（1868年5月17日）、新選組局長の近藤勇は平尾宿脇本陣で20日間留置された後、この付近に造られた板橋刑場で斬首された。後に造られた供養碑の右側面には、戦死者40名、左側面には病死者、切腹、変死、隊規違反で処刑された64名の名が刻まれている。塔の右隣には慶応4年に作られた近藤勇の墓、塔の建立者・永倉新八の墓もある。また五稜郭で戦死した土方歳三の供養碑もある。供養碑があるあたりは、板橋宿で亡くなった遊女などの遺骸が投げ捨てられていた場所だという。明治期の写真では野原の真中に供養碑が建っている。

板橋刑場跡　江戸の刑場としては鈴ヶ森（品川区南大井）や小塚原（荒川区南千住）が知られる。板橋で捕らえられた罪人は普通は小塚原に送られて刑が執行されており、板橋刑場というものは本来は存在しない。近藤勇を捕縛した後、裁判などの手続きを経ず、官軍がこの近辺に臨時に仮設の刑場を設けて処刑をしたため、板橋の刑場と呼ばれるようになったという。

3. 千川上水（せんかわ上水）　玉川上水から保谷で分水して、上石神井、富士見台、練馬、江古田、南長崎、大山を経て、板橋区役所付近から中山道南側を併走する。明治通り付近で北へ折れ、王子で石神井川に流れ込んでいた。

1696（元禄9）に湯島聖堂、上野寛永寺、小石川の白山御殿、浅草寺などに給水することを目的に建設されたが、1707（宝永4）に周辺の村からの要請で用水として田畑への給水を始めた。しかし、1714（正徳4）に白山御殿の廃止と共に給水を停止、以後は用水として利用された。1880（明治13）、千川水道株式会社により上水として復活し、1908（明治41）まで利用された。1928（昭和3）頃から暗渠化が進められ、板橋区内は1937（昭和12）頃には暗渠になった。他の区間も1970年までに全て暗渠化され、千川通りなどになっている。

板橋駅付近では、旧中山道に沿っており、尾根筋の高い場所を流れていた。小さな谷を越えるような場所では盛り土をしており、駅の東側の数字のポイントでは道を横切る水路跡が今も盛り上がっている。

4. 中山道　幕府が1601（慶長6）から7年間で他の五街道とともに整備した。古くは山道や東山道ともいわれ、江戸時代には中仙道とも表記されたが、1716（正徳6）に、幕府の通達により中山道に統一された。

5. 平尾一里塚跡　川越街道の起点。標柱などはない。本郷追分（1里）－平尾（2里）－志村（3里）－戸田（4里）

6. 谷端川（やばたがわ）　上流の豊島区内では谷端川、下流の文京区内では小石川、千川、礫川（れきせん）などと呼ばれる。要町の弁天池を水源として大塚三業通り、千川通りを暗渠で小石川へ至り、後楽園（水戸徳川家上屋敷）内を通って水道橋の西で神田川に注いでいた。大雨のたびに溢れたため、1924（大正13）には板橋駅付近から埼京線沿いに北上し、石神井川に流下する放水路が開削された。1934（昭和9）に下流部をRCの暗渠にし、上を幅員18mの道路とする工事が完成。水質悪化のため、1962（昭和37）に谷端川は廃止され、1964（昭和39）までに全区間が暗渠の下水道となった。

板橋区下板橋駅北側付近 戦災復興区画整理（第14地区）　昭和24～47年度に施行

7. 都市整備公団板橋ビュータワー　32F　高さ103m　2001（平成13）竣工
中山道踏切～国道17号までの間のこの場所には、1999（平成11）までJRの貨物駅があった。

8. 板橋駅西口地区市街地再開発　2024（令和6）年度着工、2028（令和10）年度完成予定
A街区　38F・B2F　高さ約142m　住宅・店舗・事務所・公益施設　　**B街区**　6F　店舗、事務所

9. 板橋駅板橋口地区市街地再開発　2027年６月建物竣工予定
RC造　34F・B3F　住宅（388戸）・商業・公益施設・駅施設（アトレ）　設計：東急建設・JR東日本建築設計

10. 都営三田線 新板橋駅　1968（昭和43）　都営地下鉄6号線（現 都営三田線）開通の際に開業。

都営三田線 新板橋駅A2出口わきの階段　直　16段　国道17号線の盛り土の法面に造られた階段。
A2出口は法面に開口部が設けられている。

11. 国道17号線（中山道・白山通り）

1933（昭和8）開通。道路は旧中山道とその周辺の市街地の北側、石神井川南側の本郷台地の北端部のキワを通っている。埼京線を陸橋で渡るため埼京線の近くでは盛り土がされており、道の両側に法面がある。またこの国道17号線上には、国道完成より前の1929（昭和4）に、巣鴨車庫～下板橋間の路面電車（後の都電志村線）が開通している（1966（昭和41）廃止）。

首都高速中央環状王子線（C2）　2002（平成14）、板橋JCT～江北JCTが開通。

12. カーブした緩やかな階段　カーブ　東側26段（下から18・8段）　西側29段（下から21・8段）　左右で段数が異なる。

パークタワー板橋　RC造　20F・B2F　分譲住宅・82戸　2014（平成26）竣工

二列の階段　直　28段（東側下から11・17段、西側下から11・7・10段）　坂を上った先に階段がある。

13. 都営三田線 新板橋駅A1出口わきの階段　直　42段（下から10・14・16・2段）　本郷台地のキワに国道17号の盛り土があるため、西側の階段に比べて高低差が大きく急。新板橋駅A1出入口は国道17号線沿いから下りていくが、低地側に入口がないため、階段下の住民はいちど斜面の階段を上ってから、再び地下鉄の階段を下らねばならない。

14. 上御代の台（かみみよのだい）**分譲住宅地**　江戸期に加賀藩下屋敷の一部だった板橋3・4丁目周辺は、明治期には三合商会という会社の所有地となり「三合野原」「三五ヶ原」と呼ばれた。その後、新潟県柏崎出身の板谷宮吉が1893（明治26）に創業した海運会社である板谷商船がこの地を取得。1929（昭和4）に東京市電が板橋まで延長したのを機に、1935（昭和10）に二代目宮吉が区画整理を行い、1938（昭和13）に分譲を行った。

区画整理に際して、公園用地の確保が求められていたため、東京市が板谷氏から公園用地の無償提供を受け、公園造成を代行し、1937（昭和12）に東京市**板谷公園**を開園。二か所の出入口に残る銘板はその際に設置されたもの。その後、都制施行により都立公園となり、1950（昭和25）に板橋区に移管された。区内に現存する公園の中で開園時期が最も古く、また地域の歴史がよく反映されている。板橋区の登録文化財（史跡）。

15. 石神井川　小平市花小金井南町に源を発し、東京都北部（小平市、西東京市、練馬区、板橋区、北区）を東へ流れる。練馬区では、武蔵関公園の富士見池、石神井公園の三宝寺池、豊島園池などの湧水などを合わせる（近年は富士見池や三宝寺池は湧水が減少。また三宝寺池と石神井池は石神井川に接続していない）。王子駅の下を抜け、北区堀船三丁目で隅田川に注ぐ。石神井川は金沢橋付近（埼京線の上流約200m）から音無橋にかけて**音無渓谷**と呼ばれる深い谷となっていた。

現在、渓谷部分はほとんどがコンクリートの垂直護岸となり、屈曲部の直線化や飛鳥山隧道建設などの改修によって流路も大きく変わっている。直線化の結果残った旧流路の一部は、音無もみじ緑地、音無さくら緑地などとして整備されている。

昔の石神井川は、上野の不忍池へと流れていたが、流路変更により上野台地を横切る現在の形になった。これに関しては、1）縄文末期の気候異常による洪水で隅田川への越流が発生したとする説、2）室町時代に流域の地方豪族、豊島氏が領内の治水、利水の為に開削したとする説、3）江戸時代に江戸の街づくりの一環として、治水対策で開削されたという説があるが、江戸時代初期の地図で既に現在の流路が画かれており、3）ではないと言われる。1）は、周辺の土地のボーリング調査や泥炭層の炭素同位体による年代測定などから立論したもので、近年はこの説が比較的有力視されている。

16. 加賀公園 加賀前田家下屋敷跡（江戸下屋敷平尾邸）

1679（延宝7）、加賀藩主・金沢城主前田綱紀が、幕府から現在の加賀1、2丁目及び板橋3、4丁目の一部地域、約6万坪の土地を拝領し、下屋敷を建設した。最盛期には約218,000坪に及ぶ広大な敷地で、徳川御三家を含めて、江戸に所在する大名屋敷では最大の広さとなっていた。邸内には石神井川が流れ、その水流と千川用水の配水を利用した大池が設けられ、築山や立石、滝などが各所に配された池泉回遊式庭園が展開し、その規模は本国金沢の兼六園の約7倍の広さだった。

加賀藩の三つの屋敷はいずれも旧中山道に沿っており、本郷（現東京大学本郷キャンパス）の上屋敷には藩主やその家族が住み、駒込（本駒込6丁目）にあった中屋敷には隠居した藩主などが住んでいた。

下屋敷は通常は藩主と家族のための別荘として使われ、保養や散策、時には鷹狩や花火などが行われた。参勤交代時には前田家の藩主が休息をとり、江戸へ出入りする際の装束替えの場としても利用され、家族や家臣による送迎の場にもなっていた。邸内には与力を筆頭に50人ほどの詰人、定番足軽と呼ばれる人々がここを管理していた。

幕末期には園遊会も催され、そこに招かれた松平容保は、まるで桃源郷のようだと述べたという。また邸内でオランダ式ゲベール銃を使った調練も実施された。この他、石神井川の水流を利用して大砲の製造も行っている。

明治維新後は金沢県邸となったが、1871（明治4）に兵部省が火薬製造所用地として一部を取得、1876（明治9）に一帯は陸軍の**板橋火薬製造所**となった。石神井川からの分水を利用した水車で火薬を製造する圧磨機を動かしていたという。

1901（明治34）には陸軍火薬研究所も設置された。なお板橋火薬製造所は1940（昭和15）に**東京第二陸軍造兵廠**（二造）に改組された。戦後は民間に払い下げられ、学校、病院、研究所などとなり、下屋敷・平尾邸の面影は、加賀公園に残る築山の一部だけとなった。

板橋区は旧野口研究所敷地の東半分を2017年に購入。現在の加賀公園と併せて、一帯が2017（平成29）に国指定史跡に認定された。計画では加賀1丁目周辺の約1.2haを、近代化・産業遺産を保存・活用した「史跡公園」として整備する予定。基本構想では、加賀公園エリア、旧 火薬製造所エリア、旧 理化学研究所エリア、石神井川エリアの4エリアからなる整備が提案されている。2021年度に公園整備着工、2024年度のグランドオープンを目指す方針。

公園内の階段　入口 14段　　築山下 8段　　築山東側 32段　　築山西北側 22段　　築山西南側 25段　　築山山頂西側 6段

電気軌道（トロッコ）線路敷跡　加賀公園から西側の野口研究所の構内にかけて、板橋火薬製造所内を走っていた電気軌道（トロッコ）の線路敷跡が残っている。軌道は1905（明治38）から敷設が始まり、2年後には製造所内の火薬研究所（現加賀公園・野口研究所付近）や本部（現 東板橋体育館付近）、原料倉庫（現 金沢小学校付近）を結ぶように延伸された。

以降も軌道網の整備は進められ、1923（大正12）にはほとんどの建物が軌道によって結ばれ、さらに北西の北区西が丘周辺の兵器支廠（後の補給廠）にも延びていた。北区十条の銃包製造所や王子の分工場とも結ばれ、製造所内外の物資や人の運搬を行っていた。なお、この軌道は幅が750mmと狭く、そこを走る電気機関車も小型で、その車体形状から「だるま電車」、走りながら鐘を鳴らしたことから「チンチン電車」とも呼ばれた。

弾道検査管（爆速測定管）の標的　戦前、この場所には火薬研究所があり、弾薬の性能実験などが行われていた。西側の野口研究所構内には、今も試薬用火薬貯蔵庫や防爆壁などの構造物が残されている。加賀藩下屋敷内の築山の中腹に造られたコンクリート製の構築物は、野口研究所内に残る弾道検査管（爆速測定管）の標的の跡。長さ十数m、内径686mmのコンクリート製の弾道検査管は、技術者の間でトンネル射場と呼ばれ、火薬（発射薬）の種類や量を変えて、弾丸の速度などを測定・観測する装置で、弾丸はこの築山の標的に向って撃ち込まれていた。

17. 野口研究所 跡　野口遵が1941（昭和16）に私財を投じて設立した研究所。現在は化学技術振興事業を目的とする公益財団法人で、学術研究機関として研究活動、教育活動ならびに研究助成活動を行っている。研究領域は、糖質・糖鎖、新規触媒材料で、有用物質の創出とその合成技術に関する研究を行っている。研究所の建屋は旧陸軍火薬研究所のものだった。最近、研究所は西側に移転。敷地の東半分は板橋区に売却され公園として整備予定。西半分はマンション（アトラス加賀、15F、2020）となった。

野口 遵（のぐち したがう、1873〜1944）　日本窒素肥料（現チッソ）を中核とする日窒コンツェルンを一代で築き、電気化学工業の父、朝鮮半島の事業王などと称された。チッソの他にも、旭化成、積水化学工業、積水ハウス、信越化学工業の実質的な創業者でもある。戦時中、朝鮮半島に進出し、朝鮮総督府の手厚い庇護の下、鴨緑江水系に赴戦江発電所など大規模な水力発電所を多数建設し、現在の咸興市の一部に巨大なコンビナートを造成した。さらに、日本軍の進出とともに満州、海南島にまで進出した。1940年に京城で脳溢血に倒れ、実業界から引退。翌年、科学振興・朝鮮教育振興のため私財3,000万円を投じ、2,500万円で野口研究所を設立、500万円を朝鮮奨学会に寄付した。

18. 愛歯技工専門学校 跡　1925（大正14）に私立としては日本で初めて設立された歯科技工士養成学校（2019（平成31）閉校）。加賀橋北側にあったRC造平屋の建物（駐輪場・リクリエーション施設として使用、2023.11解体）は、東京第二陸軍造兵廠の旧火薬庫を転用したもの。　**加賀親水護岸入口の階段**　28段（下から14・14段）

19. 理化学研究所 板橋分所　湯川秀樹、朝永振一郎らが過去に研究していた施設で、現在は素形材工学研究室として、鏡面加工、微細加工の研究を行っている。素形材工学研究室の建物は煉瓦造で、明治期の板橋火薬製造所当時のもの。この板橋分所は数年の内に移転予定で、板橋区が同分所の敷地も購入し、史跡公園の一部として、施設の保存、整備を行う予定。

独立行政法人 理化学研究所　1917（大正6）に創設された物理学、化学、工学、生物学、医科学など基礎研究から応用研究まで行なう日本で唯一の自然科学の総合研究所。略称：理化研・理研。本所は埼玉県和光市。日本国内には、和光研究所、筑波研究所、播磨研究所（兵庫県佐用郡）、横浜研究所、神戸研究所、駒込分所、板橋分所がある。

20. 東京家政大学　1881（明治14）　渡辺辰五郎が本郷湯島で裁縫の私塾、和洋裁縫伝習所を開設したのが始まり。日本で最初の服装を教授する専門学校だった。1946（昭和21）に現在地に移転。1949（昭和24）に東京家政大学となる。

キャンパス内には、東京第二陸軍造兵廠板橋工場の時代に建てられた煉瓦造の工場建物がいくつか残っており、現在も校舎として使われている。うち3棟は登録有形文化財。

21. 愛誠病院　1952（昭和27）開院。敷地内の一部建物は東京第二陸軍造兵廠板橋工場の時代に建てられたものの模様。

22. 王子新道（おうじしんどう）　1888（明治21）に東京府初の府道として建設された、板橋宿から王子へ至る道。
旧中山道仲宿交差点から板谷公園北側、金沢橋を経て、滝野川4丁目交差点へ向かう。

23. 十条駐屯地一帯（陸軍銃砲製造所、東京第一陸軍造兵廠十条工場　TOD第4地区）

戦前は旧陸軍の銃砲製造所、戦中は東京第一陸軍造兵廠十条工場で、陸軍で使われる銃弾などの兵器を製造していた軍用地だった。戦後は米軍に接収され東京兵器補給廠（TOD（Tokyo Ordnance Depot））の第4地区となり、極東陸軍地図局・第29工兵大隊が置かれた。その後、一部は返還され陸上自衛隊十条駐屯地になったが、残りは米軍の王子キャンプ（またはキャンプ王子）として利用され、ベトナム戦争時にはキャンプ内に野戦病院も置かれた。このため野戦病院の閉鎖運動や、日本への敷地返還などを求めたデモなどが付近ではしばしば行われた。1971（昭和46）にようやく全てが返還され十条駐屯地他として利用されている。

1905（明治38）　日露戦争を機に弾薬（銃包）の増産が必要になったことから、小石川（現 後楽園周辺）から東京砲兵工廠が一帯に移転・拡張された（後の東京第一陸軍造兵廠）。
1930（昭和5）　本部建物（現 **中央公園文化センター**）が竣工。
1945（昭和20）　敗戦により、一連の施設が廃止される。
1947（昭和22）　米軍に接収され、東京兵器補給廠（TOD）第4地区（後のキャンプ王子）となる。
1958（昭和33）　接収された軍用地の一部が返還され、翌年、陸上自衛隊十条駐屯地となる。
1961（昭和36）　米軍接収地の方はキャンプ王子と改称。
1966（昭和41）　部隊のハワイ移転のためキャンプ王子は閉鎖されたが、土地は返還されなかった。
1968（昭和43）　ベトナム戦争による負傷兵のため**米陸軍王子病院（王子野戦病院）**が開設される。1969年12月閉鎖。
1971（昭和46）　残りの接収地が返還され、**北区立中央公園・十条駐屯地**・東京成徳短期大学・公務員宿舎他になった。
1976（昭和51）　北区立中央公園が開園。
1981（昭和56）　中央公園文化センター（旧東京第一陸軍造兵廠本部）が開館。
2005（平成17）　稲荷公園を再整備し中央公園に編入。
2008（平成20）　中央図書館「赤レンガ図書館」が開館。

24. 北区立中央公園文化センター　1930（昭和5）竣工。旧 東京第一陸軍造兵廠本部庁舎、米陸軍司令部、米軍王子野戦病院
当初は茶色の外壁だったが、米軍による接収後に白色に塗装されたという。2014（平成26）に耐震補強、EV設置等の改修工事が完了し、リニューアルオープン。

東京砲兵工廠 銃包製造所のボイラー部品と鋼製耐震煙突銘板　弾薬（銃包）の製造に必要な工作機械の動力として、英国バブコック&ウイルコックス社製のWIF型蒸気ボイラーが導入され、ボイラーの煙突には、東京芝浦製作所製の鋼製耐震煙突（煉瓦造の煙突の周りに鉄板を巻き、耐震性を高めたもの）が使われた。十条自衛隊の施設建替の際に解体・保存された、ボイラーのドラム・水管の一部・鉄製の扉、および、鋼製耐震煙突の銘板が展示されている。

赤羽台第3考古墳石室　1982（昭和57）に、東北新幹線工事に伴う発掘調査で赤羽台4丁目の星美学園内で発見された横穴式石室。約1400年前の古墳時代に作られたもので、ほかに10数基の古墳、横穴墓群、多数の竪穴住居跡が見つかったが、石室のみをそのまま切り取り、移設・展示している。

25. 北区立中央図書館「赤レンガ図書館」（旧 東京第一陸軍造兵廠275号棟）　2008（平成20）開館。

赤煉瓦の建物は1919（大正8）に東京第一陸軍造兵廠十条工場の一部として建設された。煉瓦造1F、54×27m、屋根小屋は鉄骨造、内部の鉄骨は八幡製鉄所で製造されたもの。

建物周囲は1958（昭和33）に米軍から返還され、陸上自衛隊の敷地となったが、一部は民間に貸し出され、275号棟は東洋ゴム化学工業が運営していたタイヤ再生施設として1989（平成元）まで使用されていた。この施設の閉鎖後、建物と敷地は北区に移管。建物を解体して図書館を造る予定だったが、保存運動が起こり、煉瓦造の建物を残しつつ図書館が建てられた。煉瓦造のままでは耐震性に問題があるため、内側にRCの壁を造り、煉瓦壁は構造的に関係がない状態にして屋根も張り直した。切妻屋根の棟が二つ並ぶ形だったが、その旧建物を取り込む形で大型の図書館が建設されている。

26. 稲荷道　日光御成道から北西に分岐して、姥ヶ橋（稲付川）を経て、蓮沼村（板橋区清水町）まで続き、そこで中山道に接続していた。この道は中山道方面から王子稲荷神社へ参詣する人々に利用されていた。

27. 十条台ふれあい館前の階段　30段（下から15・15段）　**王子消防署十条出張所前の階段**　93段（下から30・30・33段）

28. 日光御成道（旧岩槻街道、鎌倉街道）　王子方面から岩淵を経て埼玉県へ抜ける路で、元々はこの街道を中心に集落が広がっていた。現在の東京都道460号中十条赤羽線は幅員8〜12mだが、補助83号線（延長2.6km）として幅員20〜30mへの拡幅が行われている。赤羽〜清水谷公園北側までの補助73号線は2002（平成14）に事業化され、概ね完成済み。十条台小学校付近〜十条小学校付近の十条Ⅰ期は平成21年度から、十条小学校付近〜環七の十条Ⅱ期は平成26年度から、環七〜清水谷公園北側の十条Ⅲ期は令和5年度頃から測量や工事が行われている。

29. 南大橋・南橋トンネル　1992（平成4）完成　　**南大橋北側の階段**　113段　　**南大橋南側の階段**　82段

南大橋の場所には明治期から終戦時まで、板橋から十条、滝野川、王子、豊島、堀船という広い地域に点在していた、陸軍造兵廠の各工場を連絡する小型電車の専用軌道が通っていた。電車は切通で岩槻街道の南橋の下を抜け、低地の上にあった「ちんちん山」と俗に呼ばれていた盛土の上を走り、JRを鉄橋で跨いで、板橋、十条地区の工場と、王子、豊島、堀船地区の各工場との間を往復していたという。ちんちん山の名は市電（ちんちん電車）のような小型電車が通っていたため。トロッコ電車は、その格好から「だるま電車」とも呼ばれていたという。

戦後この路線は廃止された。そして東京都は、終戦直後に石神井川沿いに住み着いていた在日朝鮮人たちを、この軍用電車跡地に強制的に移住させた。このため盛り土や南橋の切り通しの場所には20件近くのバラックの長屋が長期にわたって残存していた。**ちんちん山児童遊園**には、盛り土（ちんちん山）の下をくぐっていたトンネルの石組みがモニュメントとして残されている。

南大橋は、旧日光御成道と低地側を結ぶ道として、JRをも越えて東北側へ至るものが造られたが、一方で、岸町周辺は崖地とJRに挟まれて交通が不便だったため、高台上とをつなぐ南橋トンネルも建設された。このためここはトンネルの上に橋も架かる変則的な構造になっている。

30. 三平坂（さんぺいざか）　坂名は、江戸時代の絵図にある三平村の名からとも、室町時代の古文書にある十条郷作人三平の名からともいわれる。農家の人が水田へ下る通路だったが、名主の滝への道としても利用されたらしい。

31. 名主の滝（なぬしのたき）**公園**　江戸時代に王子村の名主、畑野孫八が屋敷内に滝を開き、茶を栽培して一般に開放したのが始まり。明治中期には貿易商、垣内徳三郎の所有となり、塩原の風景を模して庭石を入れ、ヤマモミジなどを植栽、渓流をつくり一般に供した。1938（昭和13）には精養軒が買収し食堂などを営業していたが戦災で焼失。1960（昭和35）に東京都によって公園として整備され、その後北区に移管された。園内には、男滝（おだき）、女滝（めだき）、独鈷の滝（どっこのたき）、湧玉の滝（ゆうぎょくのたき）の4つの滝が復元されており、地下水をポンプで汲み上げて水を流している。

32. 王子稲荷の坂　坂の北側にある王子稲荷神社にちなむ。

33. 王子稲荷　荒川の氾濫原が広かった頃、その岸に鎮座していたため、昔は岸稲荷と言われた。徳川家康が王子稲荷、王子権現、両社の別当であった金輪寺に宥養上人を招いて以降、江戸北域にあって存在を大きくした。毎年大晦日の夜、三十三ヶ国・関八州諸国の狐が、神社の東にある古い榎の木の周囲に集まり、装束を改めるという、**王子の狐火**の民話伝承で有名。

康平年間（1058−65）に、源頼義が奥州追討の際に、関東稲荷総司として崇めたと伝えられる。神社は江戸中期までは、この「関東」を、陸奥国までを含む東国三十三国としていた。しかし、寛政の改革の際、幕府の指示で、関東八州の稲荷の総社とのみ名乗ることとなったため、以後、関八州稲荷の頭領として知られるようになった。

男坂　23段　　**女坂**　28段　　**穴稲荷の参道**　計38段

34. 中央工学校　1909（明治42）に創立した専門学校。工業立国を目指す当時の政策に対応するかたちで、建築・機械工学・設備・土木工学の4学科による夜間の工業学校（各種学校）として帝大の講師陣を多く集めてスタートした。専門学校だが卒業が難しい学校だった。卒業生は約10万人に上り、田中角栄も同校の卒業生で、1953（昭和28）には母校の校長にも就任した。

35. 中央工学校前の階段　29段（下から9・11・9段）

36. 王子大坂　飛鳥山に沿って東に下った岩槻街道は、石神井川を渡ってから左に曲がり、北西向きに台地を上る。この坂が王子大坂。上り口に子育地蔵があったので地蔵坂とも呼ばれ、昔は縁日でにぎわった。また、坂の地形が海鳥の善知鳥（うとう）の嘴のようなので「うとう坂」の名もある。

コンビニわきの階段　25段（下から9・9・7段）

37. 権現坂　名称は、王子権現社（現在の王子神社）から採ったもの。

38. 王子神社（旧称王子権現）　創建年は不詳だが、平安時代後期、源義家の奥州征伐の折、祈願を行ったと伝えられ、古くから崇められていたと考えられている。1322（元亨2）、領主豊島氏が社殿を再興し、熊野から若一王子宮を勧請したことから、王子神社となった。小田原の北条氏が関東を支配した時代も崇敬を集め、更に江戸時代を通じて徳川幕府の庇護を受けた。明治期にも東京十社に選ばれ、1975（昭和50）に昭和天皇の即位50年を記念して、「東京十社巡り」が企画され現在に至る。東京十社（日枝神社・根津神社・芝大神宮・神田神社・白山神社・亀戸天神・品川神社・富岡八幡宮・王子神社・赤坂氷川神社）

　戦前は多くの樹木が茂っていたが、戦災で東京都指定天然記念物の大イチョウを残し、社殿など大半を焼失。現在の権現造りの社殿は、戦後、1964（昭和39）の第一期、1982（昭和57）の第二期造営を経て、再建されたもの。

関神社・毛塚　「これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関」の和歌で有名な蝉丸は、髪の毛が逆髪で嘆いていた姉のために「かもじ・かつら」を考案して髪を整える工夫をしたという。そこから「髪の祖神」として崇敬され、関蝉丸神社がゆかりの滋賀県大津市の逢坂山に奉られた。江戸時代にかもじ業者を中心に王子神社境内に境内社が造られた。

王子神社南側参道の階段　秋に銀杏の落ち葉が積もって美しい階段。　44段（下から4・9・4・16・11段）
幅2.0〜3.2m　高低差約10m　長さ約40m　蹴上13〜18cm　踏み面不規則cm　傾斜約10°　「東京の階段」p.76

39. 音無川　石神井川は北区付近では音無川と呼ばれた。この名は徳川吉宗が、飛鳥山や王子権現が、吉宗の出身地である紀州ゆかりの名であることに鑑み、紀州熊野の川の名を付けたものと言われる。また根岸方面への用水路も音無川（石神井用水とも呼ばれた）と呼ばれた。これは王子駅付近で石神井川に堰を設け、分水した水を東北線沿いに引き、根岸を経て三ノ輪へ流し、コツ通り沿いを流れ、山谷堀に流し込んでいたもの。1934（昭和9）に暗渠化され道路となった。

石神井川飛鳥山隧道　石神井川は王子駅付近で飛鳥山（上野台地）にぶつかるような形だったため、たびたび洪水が発生したため、1966年から飛鳥山の下を2本のトンネルで通す飛鳥山分水路（バイパス）が建設され、1969（昭和44）に完成した。

40. 音無親水公園　石神井川の旧流路に整備された公園（北区立）。古くから景勝の地として親しまれてきた。洪水による被害を防ぐため、河川改修工事が昭和30年代から始められ、石神井川の流路は変更されたが、残された旧流路にかっての渓流を取り戻したいとして、この公園が造られた。現在は汲み上げた地下水が流されている。日本の都市公園100選（都内では他に、国営昭和記念公園、日比谷公園、上野公園、水元公園、代々木公園）。親水公園を通った水は、王子駅の下を潜り東武ストアと王子駅の間を東南に流れ、石神井川に注いでいる。

41. 音無橋　昔の石神井川（音無川）に架けられた橋。1930（昭和5）完成。設計は増田淳。鉄筋コンクリート製の三連上路アーチ橋。照明灯のデザインは建築当時のものを踏襲している。半円形にせり出したアルコーヴは建築当初はなく、後に追加されたもの。山田守設計の聖橋（1927（昭和2））に似ているが、路面を支える支柱上部のアーチの形状が、聖橋では放物線を描き表現派的になっているのに対して、音無橋では単純な円弧となっている。

42. JR王子駅

1883（明治16）　日本鉄道の上野駅・熊谷駅間の開業と同時に開設。東北本線で最も古い駅のひとつ。
1906（明治39）　買収により国有化される。
1909（明治42）　線路名称が制定され、東北本線の駅となる。
1928（昭和3）　京浜線（現 京浜東北線）が赤羽駅まで運行。同時に京浜線の停車駅になる。

都電荒川線 王子駅

1911（明治44）　王子電気軌道として飛鳥山上（現飛鳥山）〜大塚が開業。
1913（大正2）　三ノ輪（現三ノ輪橋）〜飛鳥山下（現梶原）開業。
1915（大正4）　王子〜飛鳥山開業。王子の停留場 （電停）を設置。
1942（昭和17）　電力統制と交通統制により東京市に事業譲渡。王子電気軌道は清算。軌道事業は東京市電となる。
　　都電27系統（三ノ輪橋〜赤羽）と、32系統（荒川車庫前〜早稲田）として、2路線を別々に運行。
1972（昭和47）　27系統の一部（王子駅前〜赤羽）が廃止。この年までに多くの都電が廃止されたが、ここは自動車が通行しない専用軌道が多かったため、廃止に至らなかった。王子駅前〜飛鳥山は併用軌道。
1974（昭和49）　27系統と32系統を統合し「荒川線」と改称。

東京メトロ南北線 王子駅

1991（平成3）　営団地下鉄南北線の駒込・赤羽岩淵間が開業、乗換駅となる。

【その他】

43. 谷津観音の坂　坂上の寿徳寺に谷津観音の名で知られる観音像が祀られているため。江戸時代には大門通とも呼ばれた。

44. 御代の台の坂（みよのだいのさか）　明治天皇が行幸の折、板橋区・北区境界付近の高台から川越方向を視察したことから、この周辺の高台を御代の台と呼ぶようになったらしい。

45. 狐塚の坂（きつねづかのさか）　坂を上った東にある滝野川消防署三軒家出張所の場所に狐塚という塚があったことから。

46. 本郷通り　千代田区神田錦町から北区滝野川に至る道の通称。本郷通りは江戸時代に整備された日光街道の脇街道で、徳川将軍家が日光東照宮へ社参する際に利用した街道。本郷追分（文京区弥生一丁目）で中山道から分岐し、幸手宿で日光街道と合流する。「日光御成道」や「岩槻街道」とも呼ばれる。

47. 飛鳥山・飛鳥山公園　徳川吉宗が享保の改革の一環として整備・造成を行った公園として知られる。吉宗の治世の当時、江戸近辺の桜の名所は寛永寺程度しかなく、花見の時期は風紀が乱れた。このため、庶民が安心して花見ができる場所を求めたという。開放時には、吉宗自ら飛鳥山に宴席を設け、名所としてアピールした。飛鳥山の地名は、鎌倉時代末の元享年間（1321～24）にこの地の地頭、豊島佐衛門が、紀州熊野の飛鳥明神を遷したところから生まれたという。

飛鳥山はまた、文明年間（1469－77）に豊島氏の庶家、滝野川氏が飛鳥山城を築城した場所でもある。しかし1477（文明9）に滝野川氏が太田道灌に破れ、豊島氏と共に滅亡したため廃城となり、現在は遺構も残っていない。

1720（享保5）　徳川吉宗がサクラの苗木を植える整備を行う。
1737（元文2）　江戸庶民に一般開放。
1873（明治6）　太政官布達により、上野公園・芝公園・浅草公園・深川公園と共に日本最初の公園に指定される。
1879（明治12）　渋沢栄一が飛鳥山に別荘を構える。1901年から栄一が死去した1931年までは本宅として使用。
1883（明治16）　高崎線の開通に伴い、かわらけ投げが禁止される。
1945（昭和20）　空襲により旧渋沢住宅の大部分を焼失。残った旧邸は後に重要文化財となる。
1970（昭和45）　回転式展望タワー「スカイラウンジ」（通称・飛鳥山タワー）開業。（1993（平成5）廃止）
1998（平成10）　園内に三つの博物館が開館。

一帯は小高い丘だが、飛鳥山は国土地理院の地形図には記載されておらず、標高も正確には測量されていなかった。公園を管理する北区は、東京都で一番低いとされる港区の愛宕山（25.7m）よりも低い山ではないかと2006年に測量を行い、標高25.4mであることを確認し、国土地理院に飛鳥山を地形図に記載するよう要望したが、地図中に記入するスペースがないとして採択されなかった。

あすかパークレール（飛鳥山公園モノレール）**・アスカルゴ**（車両名）　飛鳥山公園を利用しやすくするため、北区が設置した、無人運転の自走式モノレール。延長48m、傾斜角24°、16人乗り、片道2分、標高差17.4m。2009（平成21）運行開始。

【地名・町名など】

板橋　中山道板橋宿内の石神井川に架けられた橋が、地名・区名の由来。「板橋」の橋名は『義経記』等の文献の中で、平安時代の昔より既にあったものとして登場する。古代から近代のものは文字どおり板張りの木橋で、江戸時代のものは、長さ9間（約16.4m）、幅3間（約5.5m）の緩やかな太鼓橋で、長谷川雪旦の『江戸名所図会』にも描かれている。明治以降も木橋だったが、1932（昭和7）以後はRC橋にされた。現在の橋は欄干に木目模様を施したRC橋で、1972（昭和47）完成。

加賀　一帯がかつて加賀藩主前田氏の下屋敷だったことから。

北区　1947（昭和22）に滝野川区と王子区が統合されて誕生。

王子　王子村は荒川の上流から見て氾濫原の右岸にある台地だったため、古くは岸村と呼ばれた。鎌倉時代後期の1322（元亨2）に、この地に熊野の若一王子を勧請した（現在の王子神社）ことから王子村に改称したといわれる。平安時代後期から室町時代にかけては平塚城（上中里1丁目・平塚神社付近）を本拠地とする豊島氏が支配した豊島庄の一部だった。江戸時代になると王子村の中心には日光御成街道（岩槻街道）が通って江戸の市街と直結された。

王子本町　かつての王子村のうち、王子神社が置かれた本村に該当する地域。

岸町　荒川の上流から見て氾濫原の右岸にある台地だったことから、周辺は古くから岸村と呼ばれた。その後、王子神社が勧請された際、王子神社周辺は王子村と改称し、当時岸稲荷と呼ばれていた王子稲荷周辺に岸の名が残されたという。

十条　十条の名は1448（文安5）の熊野領豊嶋年貢目録に初めて現れる。由来としては、豊島清元が熊野権現を勧請した際、紀州の十条峠に因んでつけたとする説と、古代の条里制に基づくという説がある。

滝野川　本来は石神井川のことで、由来ははっきりしないが、石神井川の滝のように速い流れからと言われる。豊島氏の系統である滝野川氏によって支配され、滝野川城（金剛寺の場所）が建造された。滝野川氏の城としては、ほかに平塚城、飛鳥山城（飛鳥山公園の丘）があったことがわかっている。

【参考文献・参考サイト】

『江戸東京坂道事典』石川悌二、新人物往来社、1998
『東京の階段』松本泰生、日本文芸社、2007
『江戸・東京地形学散歩』松田磐余、之潮、2008
『東京古道散歩』荻窪 圭、中経文庫、2010
『今昔東京の坂』岡崎清記、日本交通社出版事業局、1981
『川の地図辞典－江戸・東京23区編』菅原健二、之潮、2007
『川跡からたどる江戸・東京案内』菅原健二、洋泉社、2011
『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』松本泰生、洋泉社、2017
『凹凸を楽しむ　東京「スリバチ」地形散歩』皆川典久、洋泉社、2012
東京23区の坂道　http://www.tokyosaka.sakura.ne.jp/index.htm
坂学会　http://www.sakagakkai.org/
東京の斜面地空間 東京の階段　http://tokyostair.web.fc2.com/topo/index.html
他、Wikipedia